
みずうみのうみの船-ゆらゆら-

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みずうみのうみの船 - ゆらゆら -

【Nコード】

N3107L

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

リユラ織女星が北辰の祝福を受け、カノープス南辰の水先案内人が極の宙で微笑む航海の女神となつて久しい。

空に青い大気の層が厚くあり、大陸があつたのは、もう大昔の話。それらの大陸はすべて海へと沈み、今はかつて天にそびえていたであろう山脈だったモノが、大海原に小さく散らばっているだけの、何も無い水の星。そのわずかに残るその大地でさえ、黒くすすけている。

人々はこの星で生きていくために、自らの叡智をそそぎ、巨大な

硝子の玉を海に浮かべその中に暮らしていた。

少年と肺魚と機械人形は、まるで箱の船にも似た完全に管理された小さな世界で、日常を生きている。

0・芯の星

織女星^{リユラ}が北辰の祝福を受け、南辰の水先案内人^{カープス}が極^{そら}の宙で微笑む航海の女神^{ポールスター}となつて久しい。

空に青い大気^{オゾン}の層が厚くあり、大陸があつたのは、もう大昔の話。それらの大陸はすべて海へと沈み、今はかつて天にそびえていたであろう山脈^{オゾン}だったモノが、大海原に小さく散らばっているだけの、何も無い水の星^{せかい}。そのわずかに残るその大地でさえ、黒くすすけている。黒い土の流れ込む水はにぎり、塵の舞う風はよどみ、群青に開けた空には光が満ちている。オゾン^{そら}層に穴が開いているのだ。昼ともなれば、人体に有害な化学線^{ひかり}が天から降り注ぐ……

オゾンの層は、かつて地球すべてを覆っていたらしいが、いつしかその穴は極地から広がっていき、今となつては、赤道付近に申し訳程度に残っているだけであつた。

—— 死の星、地球。

いや、まだ、そうではなかった。それでも、今だにこの星を辛うじて死の星に至らしめていないのは、母なる海がまだ多くの生命を産み出しているからである。水や空気は汚染され多くの生物が住めない環境となつてはいるが、毒に満ちた環境であらうと、適応する生命はいるもので、何の問題もなく生きているモノ達もいた。毒に満たされた星となつても、全く生き物の気配がしないわけではないのだ。

ただし、人類にとってそこは毒の大気。死をもたらす大地。人は、この星で生きていくために、自らの叡智をそそぎ、有害な物質を遮断し浄化するフィルターで覆い、手っ取り早く紫外線を避けるために都市を海中に沈めた。海面で光は反射するため、海中では地上ほど光が届かないのだ。その海中都市は、改良に改良を重ね、水に浮かぶ泡のように、何千年もの間、海にあつた。

地球はすでに人のためにない。新たな道を歩みだしていた。このまま地球にとどまっても、いずれくる滅びを待つだけである。

そして、いつしか人は宙に目を向けた。

それならばと、わずかな望みをかけて、この地球を飛び出し、新たな星を探す長い旅をすることを夢見始めた。

しかし、忘れてはいけない。我々が今日まで生きてゆけるのは、何もその海中都市の存在だけではない。酸素の大气がまだ厚く存在し、そして何よりも、海が残っていたことが、人類にとっては幸運であった。海は、地球の急激な温度変化を防ぎ、そして、酸性の色を示すとはいえ恵みの雨をもたらしてくれるのだ。

——我々は、海に感謝しなくてはいけない。こんなにも傷つけてなお、無償の愛で微笑む母なる海に。

「……は、ウミ、に……しな、くてはい、けない。こんな、にも……つけてな、お……の、アイで……ワ、ラむ？ ハハなるウミ、に……よん？」

子供がそうするように、読める文字だけ声に出すモノが、その部屋にはいた。

「おいらには、むずかしくて、わからないよん」

声の主は、読み進めることを断念した。自分の寢床から起き出してみれば、すでにその部屋に人の姿はなく。机の上に開かれたままになっていた本が目に入った時、それに興味を持ち、文字を読み上げてみたものの、いかんせん難しすぎた。声の主は、ひらがなは読

めたが、漢字は数えるくらいしか解読できなかったのだ。しかし、解読できた文字だけで、勝手に物語を創造する知能は持ち合わせていた。

「ウミは、こんなにも、アイがいつぱいよ〜ん。そして、わらつているおかあさんが、ウミにいるんだよ〜ん。きっとそうだよ〜ん。おいらは、ウミをおかあさんのように、アイしているよ〜ん。おいらたちが、アイせば、ウミもおいらたちを、アイしてくれるよ〜ん。アイは、すばらしいことを、おいらは、しっているよ〜ん」

納得がいく解読ができたので、その好奇心が旺盛なちいさな生き物は、満足の声を上げた。

その部屋には数多くの水槽があつた。「第1号水槽」「第2号水槽」と書かれたプレートが、水槽の一つ一つに貼られている。その声の主は、「第4号水槽」と書かれた場所を住処としている。そう、いままで、しゃべっていたのは魚だったのだ。その魚は知能だけではなく、肺呼吸の能力も持っていた。そして乾燥に強い鱗も持っているのだ。炎天下や極端に乾燥した場所でなければ、水槽の外にいても平気なのだ。しかも、この場所は完全に管理された空調の中、2、3日水槽から抜け出して歩いても、問題はなかったのだ。

しかし、その特質以外は魚と変わらない。階段は転がり落ちるように降りられるが、決して登れないし、高くに取っ手のある戸も開けられないので、実際に行くことができる場所は限られている。下の階に降りてしまったら、帰りは、誰かに、家である水槽まで連れて行ってもらうしかないのである。だが、人語を理解するので人気者である彼にとっては、その足となる者の確保には困ったことはなかった。

「おなかすいたよ〜ん」

難しい本を読んで、体は糖分を求めていた。

「へやのドアが、あいているのよ〜ん」

この水槽部屋のドアは、たいてい開いている。その魚が自由に行き来できるように。

「おいら、でかけてくるよ〜ん」

その魚は、他の仲間たちに外出を告げ、部屋の外へ向かうのでした。

0・芯の星（後書き）

現在の地球の北極星は、こぐま座のポラリスにあります。

西暦13700年頃 には、夏の大三角で有名なこと座のベガ（ラテン語でリユラ）。日本では織姫星）に移ります。

ちなみに現在、天の南極ははちぶんぎ座の中にあるけれど、付近に十分に明るい星がないから南極星にあたる星はなく、南を知るには、もっぱら、南十字星 が使われています。

そして、織姫星が北極星の時代になると、南極星はりゅうこつ座のカノープス（水先案内人という意味の星）あたりになります。

北の空の織姫星は航海の女神となって、南の空のカノープスは水先案内人となって輝き……

星の位置を測り方角を導く船乗りにとっては、女神と案内人が空に在り、航海を見守ってくれるとは……なんとも、すばらしい時代ではないか。

1・石榴石へざくろいし」の煌き

『——人は、想像幻想したモノを創造実現させる力を持つ。なぜならば、人は空を飛ぶ夢を見て、空を舞う箱を浮かべ……夜空の月を見上げては、そこへ到達したのだから』

かすみそめ
霞染の月。光をちりばめた氷のような塵が世界を覆い、淡い白に包まれる季節。「雪」と呼ばれる幻想的な結晶が、どこからともなく風に吹かれてやってくる。その水晶のような輝きは、手の平に触れると、あつという間にその形を変え、物理変化を起こして気化をしてしまう。

寒い冬にだけ降るといふ儚い夢。神秘的な舞い。たとえ空から訪れているそれが、本物でなくとも。それが美しく空から飛来する景色は人々の心を捉えて離さない。

この雪が降るとまた冬が来たのだなと思う。
ガーネット
雪と同じ色の髪がふわりと揺れる。石榴石のような瞳が白む空を見上げ、そうつぶやいた。その眼に宿す赤く煌く光は、淡い色の太陽を見つめている。

そのそらにある白い照明は、人工的な輝きを増し朝の色を告げている。夜のやさしい闇と入れ替わる時刻。その暁の色は、氷の結晶に煌き、とてもやわらかい光に包まれる。

何の問題も見つかっていない、とそうつぶやく唇からは、感情のこもった白い息はもれない。赤い眼に映る白の景色をその電腦で処理はしているが、実際に回路内に占めている事象は、異なっている。意識の大部分は、この世界のすべて、海に沈む都市を見ているのだ。

何も問題はない、再びそう呟いた。

今の時期、光源から離れた場所は、昼間になっても、薄明の色、薄暗い日々が続く。「冬」と呼ばれ、あちらこちらで、「雪」と呼ばれる、美しい氷の結晶を散らすイベントが行われる、年に一度の芸術祭なのだ。仕事も、勉強もほどほどに、人々はこの行事を楽しむ。「冬」と言っても、光が弱くなるだけで、気温が下がるわけでも、日照の時間が変わるわけでもないのだが、いつもよりも、ほんのり暗い太陽を見ると、時間は確実に移り変わり、流れ、過ぎ去っていくと、認識する。

もしも、世界に大地があつたのならば、四季があつたのならば、凍える白い大地に抱かれ眠る生命の息吹を、かすかに感じ取れただろう。しかし、この管理された世界は、年中湿度も気温も一定に保たれている。寒さ暑さといった環境は、体験できるそういう施設に行かない限り、一生その肌に感じることは無い。

何千年もの昔、この閉ざされた硝子玉に暮らす以前の人々の「四季」の記憶。

その冬の記憶は、一面が白い。

息さえも、白く凍りつく世界だった。

広場で子供たちは、雪の中を喜びの表情で駆けている。彼ら人間は、同じ日常の中、変化しながら無限の中を駆け抜ける。しかし、彼らの時間は有限だ。己のように、日々同じ試行と実行、保存と復元を延々と繰り返しているわけではないのだ。

しかし、だからと言って、その永遠に満ちた体内は、何も感じない。何もない。それをあらわす感情も、表情も持ち合わせてはいない。疑似はできるが、それはあくまで、人の模倣でしかない。その体は、人造。その表情は偽造。組み込まれたことしかできない人形

なのだから。

今思う思考も、巨大な情報管理機構の中に符合する「誰かが書き残した記録」があるからに過ぎないのだ。

そして……これからも、同じ日常は過ぎていく。表情のない赤い唇は、そうつぶやいた。

「全ては繰り返す。形を変えて、延々繰り返すのです。栄えるものは滅び……滅びの中に、はじまりがある、」

何も感じぬ、何も流れぬ大地に流れたたくさんの色と同じ輝きの命を、景色を赤い瞳で記録しながら、白い機械人形は何事もなかったかのように、次なる命令の実行のため歩き出す。その間にも、決められた試行の繰り返す作業をしている。

「あ、てれーすさんを、みつけたよん。こんにちはよん」
思考の試行を遮るように、廊下の向こう側からやって来た小さな生き物が言う。

「こんにちは。確か君は、」

柘榴石のように赤い瞳の中が、くると回る。目に映る形と耳に届く声から、「彼」の部屋にある「第4号水槽に棲む肺魚」という検索結果をだした。登録されている名前は「よんよん」である。由来は、4号水槽で「よん」と鳴くから。そういう理由で、飼い主の「彼」がつけた名前。

「よんよん。どうしたんだい、こんなところで、」

てれーすと呼ばれた人形は、いつものように、決まった動作で、やさしく微笑み返す。

「おいら、おなががすいたんだよん」
よんよんは言う。

「一緒に行こうか、その方が早い、」

よんよんを、そつとその腕に抱えると同時に、よんよんのはんが得られるであろう場所までの最短距離を検索していた。

「よ〜ん」

よんよんは、抱えられて、ご満悦のようだ。お腹が空いていたので、移動しなくてすむのは、願ったり叶ったりなのである。

厨房では、数人の料理人が各自自分の仕事をしていた。食事時が近いのだ。

「ああ、しまった。魚を切らしてしまった」

厨房にある食料の保存庫を見て、料理長ハムが困っている。この施設には常に20人ほどの人員がいる。しかし、人は一定ではなく、多い時にはすぐに食料はなくなってしまうのだ。

ふと、よんよんとハムは目が合った。

「おいらは、食べてもおいしくないよ〜ん。うろこが、とつてもかたいのよ〜ん。こらーげんなんで、たつぷりじゃないよ〜ん」

よんよんは、腕の中で飛び跳ねる。

「そんなに暴れたら、よんよんを落としてしまう、」

硬いうろこを持っているよんよんとはいえ、この高さから落ちれば痛みを感じることを知っている。

「おいら、さかなだけれど。そ、そんな目で、みないでほしいのよ〜ん。おいら、ないちゃうよ〜ん」

「はっはは、よんよんちゃんは、食べないから大丈夫だよ」

ハムは、魚の頭を撫でる。よんよんを見かけるとなぜか撫でたくなる、そんな欲求にかられるのだ。

「おいら、あせったよ〜ん、よかったよ〜ん」

「今日は、お客が急に増えたからなあ。うかつだった……」

「トレイス。いつもの場所で魚をもらってきてくれないかな」

「了解しました。よんよんの空腹が満たされ次第、その命令を実行します、」

機械的にそう答えた。

「頼むよ」

そう言うとはムは、別の料理をつくりはじめた。作るものは、何も魚料理だけではないのだ。

厨房の奥にある食料保管庫の中で、よんよんの食べられるものを手際よく探し出し、器に準備する。よんよんは、すぐにその器に飛びついた。よほどお腹がすいていたのだろう。あっという間に平らげてしまった。

「おいしかったよーん」

よんよんは、満足そうにしている。

「よんよんの彼女にも、持っていくといい、」

と、よんよんでも持ち運べるように吸盤のついた小さな容器を手渡した。よんよんのように、長時間外を出歩くことはできないが、よんよんと同種族がもう1匹いることを知っているのだ。

「かのじよって、なんだよーん？」

「愛する人ということだよ、」

「おいらは、みんなアイしているよーん。だから、みんなおいらのかのじよだよーん」

「そうだね、」

そう言ってやさしく笑って、よんよんをなでた。

「ひとりで帰れるかい？」

「おいら、えねるぎーまんたん！ だいじょうぶだよーん」

頭の上に小瓶を乗せて、よんよんは自分の部屋へ帰っていくので

した。

2・夢見る羊、ストレイシープ。

「——水に船を浮かべるだけで、そこは海となり、遠い世界への架け橋となる。それが、桶の中という小さな小さな世界だったとしても……」

「本物の雪が積もった、どこまでも続く地平線は美しいのだろうな」窓の無い殺風景な研究室の片隅でペテは、そう独り言を言う。ペテは一度だけ、その「本物に似せた冬」を、体験をしたことがある。そういう「季節」を体験する施設に、学生時代、社会見学で行ったことがあったのだ。

ペテは黒い色の眼を細め、研究室の壁の大部分を占めているたくさんモニターの画面に写る風景のひとつを見てそうつぶやいた。その画面に映るのは、大昔地球が青かったころの『外』の風景。青い海に白い雲が浮かび、大地は雪に覆われていた。

ペテは、白が好きである。

白い色は、素敵だ。

何者にも染まってしまう危うさを持った美しい純粋な色。全ての光を溶かし込んでできる色。

しかし、今はその風景はどこにも存在しない。もしも、今、地球に降り立ったのなら、見渡す限りほぼすべてが海になっている。年に数回は、雪らしきものもちらつくが、それは白ではなくいろいろな物質を溶かし込んで、黒い色をしている。

この閉ざされた空間も、明かりがなければ景色はいつも同じ色、一番嫌いな黒い色。

「厭いとわしいわしい色だ」

ペテは髪も、瞳も黒かった。この地区では、とりわけ珍しいわけではないが、白色が好きな自分にとっては、その色はコンプレックスでしかない。ペテの住む地区には、黒色素を持つ人類以外にも、白っぽい肌、白っぽい髪、赤っぽい瞳をもつ人類が数多くいる。遺伝子の突然変異ではなく、環境の変化で徐々に現れた事象である。紫外線を浴びることのないこの世界では、色素の薄い者が増えてきている。日の光の当たらない海中に暮らしていくうちに、紫外線からその身を守るための色素が退化しつつあるのだ。ここ数千年で現れた新しい人類は、昔からいる突然変異のアルビノとは区別して、『擬似アルビノ』と呼ばれている。

ペテは、彼らに淡い羨望がある。美しい色を持つ人々に。

「……だめだ。気分転換しよう。白い人工雪を見よう」
観察していようが、眼を離そうが、そうしたところで、地球の環境は変わりはないのだから。ペテは気休めに、散歩に出かけることにする。

ペテは、その廊下の向こうからやってくる、白い人影を見つけた。銀色に見える髪、煌く赤い瞳、白い肌が特徴的だ。しかし、それは人ではない。それは、機械人形のテレイスキルだ。テレイスキルでは長いので、みなはテレイスという愛称で呼んでいる。

この機械人形の容姿は、アルビノのように、髪も肌も白い。計算された狂いのないその整った容姿は、群を抜いて異質で、輝いて見える。

「こんにちは、ペテ、」

テレイスキルは、いつもと変わらない抑揚の少ない声で、人と出会ったときの挨拶をする。

「こんにちは……って、トレイス！ 君のきれいな銀色の髪も、肌も、ずいぶん濡れているじゃないか」

ペテは、トレイスキルに向かって言う。トレイスキルは、ずぶぬれだった。銀の髪から、水滴が滴っている。

「問題ない。この身体は、防水仕様。自然乾燥する、」

話によると、ついさっき、水の入ったバケツを持って、階段を駆け下りてきた子供とぶつかってしまい、頭から水をかぶってしまったらしい。床が濡れてしまったので、濡れた場所を掃除するために、掃除用具置き場へ向かっている途中らしい。

「いや、そうじゃなくて……ああ、ほら、ここ、少し汚れているじゃないか」

ペテは、白衣のポケットから出したハンカチでその汚れをぬぐう。

「機械の体なのだから、これくらいの汚れは、問題ない、」

「いや、だからね……」

しかし、ペテの言葉を遮って、トレイスは発言を続ける。

「この体は、『外』で数カ月放置しても支障がないように、できている。だから、これくらいの汚れは、問題ない、」

表情も変えず、淡々と回答する。

外の世界は、黒く汚れている。30分も外の空気を吸えば、肺の中は黒くすすけてしまうだろう。しかし、機械の体であるトレイスキルは、毒の大气の中に立っても平気なのだ。

「まさか、その姿の君を、外に放置するわけじゃないか。そんなことしたら、きれいな髪も肌も黒くすすけてしまう」

「君たち人間は、きれい好きだな、」

その言葉に、トレイスキルの赤い眼が瞬き、ペテの姿を捉える。見つめられたペテは、思わず目をそらしてしまう。心拍が意味もなく上がっているように感じる。赤面とまではいかないが、むずむず

とした、なんともいえない感情が表情に出てしまいそうになる。

「だから、そうじゃないんだ…… テレイス」

小さくつぶやく。

「君には、綺麗でいて欲しい」と、言っても、わからないだろうな

…… そのような感情は、テレイスキル機械人形の中には、存在しないのだから。

「まあ、とにかく…… 濡れたら拭こうよ」

「了解、」

ペテの出した命令は、きっと遂行されるだろうが、その裏に隠されたペテの気持ちは読み取れないだろう。

テレイスキルは、「さようなら、」と一礼すると、何事も無かったかのように、廊下を歩き出す。

ペテは、遠ざかる後ろ姿に、ため息をついた。

「だれだよ、あんな中性的な容貌を実装したのは」

何千年も昔にそう造られて、ずっと変わらないあの姿に文句を言っても仕方が無い。テレイスキルは、男か女か。子供たちが一度は通る疑問。みちしかし、結局、あれはそういうモノなのだという結論になって、考えることをやめ、ひとつ大人になっていく。

人に似せた、偶像に心ときめくココロ。

紫色の淡い恋。

神は、偶像の崇拜を禁じた。

しかし、人は、それに魅せられる。

「……われわれ人は、いつも罪深く、迷える仔羊……」

「まよったら、おとなに、きくといひよ〜ん。おいらは、それで、おうちにかえられるよ〜ん」

いつからそこにいたのだろうか、ペテの足元に魚がいた。これは、ペテの弟が飼っている魚だ。薄い紫色の鱗が、電燈に照らされ紫水晶アメジストのように輝いている。

「よんよんか」

「ひつじさん、まいごなのよ〜ん？ おいらが、しつてるところなら、あんないするよ〜ん」

ペテは苦笑いを浮かべながら、よんよんをなでる。ペテは、話を聞かれていたことに、恥ずかしさを感じるが、まあ、聞いていたのは無垢な魚だ。気にしないことにした。

「こんなところで、どうしたんだい」

「おいら、てれーすさんに、もらったごはん、ここよんに、とどけるよ〜ん」

ここよんというのは、よんよんと同属の魚で、9号水槽に棲んでいる。

「ああ、それで、よんよんは、荷物を持っているんだね。（にしても、我が弟のネーミングセンスは、口にするたびに……相変わらず、独特なことだ）」

「ひつじさんは、まいごなのよ〜ん？ まよってしまふのよ〜ん？」

「ん、ああ。でも、その羊さんは、それでいいんだ」

迷える仔羊がいなくなったら、神に救われるべき魂がなくなってしまう。神が救うべき人がなくなってしまう。神の要らなくなつた世界は、どんな世界だろう。それは、幸いなのだろうか、それとも、辛い世界なのだろうか。

「まよっひつじは、かわいそうだよ〜ん。だれか、たすけて、あげてよ〜ん」

よんよんは、難しい顔をして黙り込んでしまったペテの顔を見上げている。

「誰かに求めれば、いいものではないんだよ。答えがないんだから」「それには、こたえがないから、まよったままなのかよ〜ん？ おいら、そんなむずかしいこと、かんがえられないよ〜んでも、ひつじさんも、いつか、すくわれるといいよ〜ん」

「そうだね。まあ、この話は、もうおしまいにしよう……行く方向は同じだ。ついでだから、部屋まで送るよ」

「ありがとうくん」

よんよんは、楽に水槽おうちに帰ることができそうなので、喜んだ。

「おお、カナンじゃないか」

ペテは、よんよんを部屋に送り届けるために白い明かりの続く廊下を歩いていた。すると、向こうから、見覚えのある子供が一人やってくるのだ。

その子供は、ペテの妹であるハムの息子カナンだ。髪は栗色、瞳は赤茶で、色は濃いものの遺伝子上は、擬似アルビノに分類されている。ペテの兄弟の中では、唯一妹だけが擬似アルビノの遺伝子を持っているので、その息子が擬似アルビノになるのは、確率的にもうなずける。

人口は、ここ数百年、増えもせず、減りもせず、一定の数を保っている。限られた狭い世界では、人口は増えすぎても、減りすぎてもよくない。そういった意味では、うまく具合に世界は均衡が取れていた。世界を去った数だけ、世界に現れる。あまり変動のない世界。一見、停滞しているように見えるが、確かに、生命は循環していた。

一組の男女が一生に育てる子供の数は平均で2人。結婚しても、子を生まない組も多くいるので、実際には、子供がいれば、兄弟がいる家庭になりやすい。ペテの家も、兄弟が3人という平均的な家族構成である。

「ペテおじさん！ それに、よんよん」

カナンは、からのバケツを持ち、濡れた船を抱えている。

「そのお船は、どうしたんだよね？」

ペテの腕の中にいたよんよんは、カナンが持っているものが気になって尋ねる。

「セムおじ……セムにいに、つくつてもらったの」

カナンは、抱えていた船を持ち替え、よんよんに見せるように掲げた。船底が赤く、操舵室に藍緑色のラインが入っている、おもちゃの船だ。三角型の旗が、いくつも甲板に揺れている。

「これは、らんぎよくまる藍玉丸アクアマリンって言うの。『船乗りのお守りである藍玉の名前をつけたから、最強だぜ！』って、セムに言ってた」

カナンは、自慢げに話し出す。

「さいきょうなのかよーん！ うらやましいよーん」

「最強だった。落としても、こわれないの」

「それは、すごいよーん」

話によると、先ほど、水の入ったバケツに船を浮かべた状態で持ち運んで、階段を駆け下りていたときに、トレイスキルにぶつかったらしい。そのときに、船は階段から転げ落ちてしまったが、傷ひとつ付かなかったらしい。

「トレイスが、びしょ濡れだったのは、カナンのせいだったか」

二人の話を黙って聞いていたペテは、ついさっき会ったトレイスキルの様子を思い出していた。そういえば、子供とぶつかったと、そのようなことを言っていた様な気がする

「水の上を走って、遠いところまでいけるんだ」

「おいらも、おふねほしいよーん」

「よんよんと一緒にどこまでも泳げる船は、潜水艦だね。ぼくね、セムにいと、今度、湖に浮かべに行く約束をしたんだよね」

カナンは、よんよんの口癖をまねしだした。

「そのときは、おいらも連れていつてほしいよ〜ん」

「いいよ〜ん、やくそくしたよ〜ん」

カナンとよんよんは、船を浮かべるために湖へ行く約束をした。

「……それにしても、あの愚弟^{セム}が。趣味^{セム}にばかり命をかけて」

水棲生物と船と釣りど、それらは弟^{セム}の趣味なのだ。湖で自作の船を浮かべて遊んでいるうちはまだかわいいかもしれない。しかし、いつか、この海中都市からぬけだして、自らの手で作り出した帆船に乗って、汚染された世界を一周してしまうのではないかという、無謀な冒険^こをしかねないくらい情熱を注いでいた。

「親が親なら、子も子ということなのかな」

父と弟は特に似ていた。「船」を作る情熱という点で。

ペテもその親の血は引いてはいるものの、一番先に生まれたせいもあるからだろうか、妹や弟の面倒を見ることが多く、悲しいことに、自分のために、そこまで情熱を注げる趣味^{もの}は無かった。

ペテは、弟の将来を心配したため息をついた。

「よんよん、ごめん。僕はこれから、セムのところへ行かなくてはいけない」

兄として、言わなくてはいけない。

「わかったよ〜ん。おいら、ひとりでもどるよ〜ん」

3・永遠の輝く砂城で

『——生きている限り、絆を深めよう。ずっと、一緒に生きていよう。生きるまで、死ぬまで、それまで、永遠に』

窓からは、黄色に染まった光が斜めに差し込んでいる。窓の外は、冬の色に染まって白く輝いている。

……静かだ。

眠りから目覚めた彼女はそう思った。彼女は、寝床から出て、部屋を見回した。

……誰もいない。

この薄暗い部屋には、誰もいなかった。

部屋にたくさんある水槽は、ジジジと小さな音をたて泡を作り出している。彼女は、4号水槽にも誰もいないことに気がついた。部屋のドアが開いている……おそらく、部屋の外へ行ったのだろう。

彼女は、目覚めたばかりで、はつきりしない意識の中、ぼんやりと誰もいない4号水槽を見つめながら、その水槽の住人を待つことにした。

「ただいまよ〜ん」

待ち始めて数刻後、聞きなれた声が、彼女の耳に届いた。よんよんが部屋に戻ってきたようだ。

「おかえりヨン」

彼女は、そう彼に向かって言った。

「ここよん！ おみやげだよ〜ん」

よんよんは、ここよんと言う同属の魚にお土産を手渡した。

「ありがとうヨン。ちょうど、おなかすいたところヨン」

よんよんのお土産を見たとともに、彼女の胃が目覚めたのだ。

「そうだ。ここよん、こつちに来るよん。お外、見てみるよん」
よんよんは先程カナンから、ある情報を聞いていたのだ。ここよんと、それを一緒に見たかったのだ。

「何が見えるヨン？ 今、行くヨン」

よんよんのいる窓辺に向かう。二匹のいる部屋は高い階層にあり、そこからは、外の景色が一望できた。外は変わらず雪が降っている。「とくに、かわったようすはないヨン」

「きつと、もうそろそろだよん。……ほら、はじまるよん」

よんよんが跳ねた。外でちらついていた雪が、ぴたりと止んだのだ。そのため降雪機械をとめたのだ。そして同時に太陽光がすかに強まる。ほんのり光に色づいた空間に、突然、青や赤や緑の煌く透明な粉が、瞬き飛び回りはじめた。それは大気中の水蒸気が昇華してできた、ごく小さな氷晶、きらきらと舞う細氷である。ダイヤモンドダスト

「わあ！ こおりのひかりがきれいだヨン。氷の妖精さんが舞っているみたいだヨン」

「すごいよん！ きれいだよん！ きつと、まほうつかいが、こおりのまほうをつかったんだよん」

よんよんが、カナンから聞いた情報。それは、「細氷展覧会ショー」があるという情報。よんよんは、細氷と雪の違いがわからなかったが、カナンがとても綺麗だと言っていたので、ここよんと一緒にそれを鑑賞しなかったのだ。

二匹は、すっかり人工細氷に釘付けで、窓硝子に顔をくつつけている。おそらく、硝子に二匹の鱗のあとが残っているだろう、それほど、夢中になって眺めているのだ。

「たとえば、このうつくしい世界が、ほろんでも、おいらは、さいごまで、ここよんと、ずっといっしょに、いたいよん」

「うん、あたいも、ずっといっしょに、いたいヨン」

ダイヤモンドは永遠の輝き。その魔法は、永遠の絆。
きらめく氷の細。冬の太陽に照らされた二匹の影は、窓辺でいつ
までも寄り添っていた。

4・輝く白月の泡。

『——空を見上げれば、月はいつもあるはずなのに。

空がガラスに覆われてから、見上げてみても映し出されるのは映像だけ。

それは、身近にあるが、しかし、あいたい時に、それはない。

すでに失って久しく、いつしかあったことさえ、忘れていく……』

「おや、我が息子も留守か」

廊下から部屋をのぞくのは初老の人物であった。袖や襟の縁に白いラインが2本入った立襟で群青色の制服を着ており、胸元には、瀟洒な女性の横顔とそれを囲むような躍動的な竜の紋章が、刺繍されていた。印象的なのは、その女性の霊妙な瞳である。その瞳は、エメラルド翠玉のような石でできており、まるで失った青い星を憂いているように青緑色に濡れていた。

もしも彼が、日に焼けた小麦色の肌を持ち、羽についた半円の帽子や、黒い眼帯を身につけ、片手が義手型の武器だったのなら、物語の中に出てくる海賊の船長！と叫びたくなるだろう。

しかし彼は、擬似アルビノである。日に焼けることはできない肌は雪のように白く、年取ってすっかり白髪になった頭髮や髭は羊毛のようで、眼は美しくバラの花のような色をしている。ますます——チロシナーゼ陰性型先天性色素欠乏症のようになっていた。

「ヌーフぱばさん、おひさしぶりだよーん」

「いらっしやいヨン」

窓際で寄り添っていたよんよんここよんは、同時に振り向いて言う。

「おや、デートの邪魔をしてしまったかな？」

「そんなことないよ〜ん」

「ぬーふぱさんは、お仕事お休みなのかヨン？」

「いや、こちらでの仕事が入ったので、三月ぶりに我が家に帰ってきたのだが……」

ヌーフは今、地球最大の企業「- ReEarth -」に勤めている。無理やり訳すのならば、「地球再生」であろうか。彼らは、その名の通り汚染された地球の中で、なんとか人類の住める場所を創るために翻弄していた。しかし、それは初期の頃の話。今では人類の住処を、地球の外、宇宙に求めている。

今のところ、人が住んでいるのは地球以外には、月と火星である。月は比較的近いので長期出張のような感覚で行き来ができるのだが、火星の場合は気軽にというわけにはいかない。地球から火星まではどんなに近づいたときに宇宙船を打上げても、1年以上かかってしまふのだから。火星に行く人の多くは、赤い色の新天地に移住し永住した。

ちなみに、一番最初にできた火星の都市には、地球を見たこともない世代がいると言う。

ヌーフの主な勤務場所は、月である。そう、あの地球唯一の衛星と地球を往復しているのだ。一回月に行ってしまうと、数ヶ月は滞在する。通信などで連絡は気軽に取れるのだが、自らの家族がいる地球にはなかなか帰ることができないのだ。

「我が子たちと孫は、いずれも部屋にはいなかった。いつもの事ながら駆けつけてくれたのは、トレイスキラだけだったな」

トレイスキラは、この世界のほぼ全てを見ている。トレイスキラ自体は末端の機械だが、全ての情報は常に中枢から流れてくるのだ。その中から、月から来る船の乗客にヌーフがいると言う情報を見つけたのだろう。ヌーフの家族が住む地区コロニーに配属されている機械人形は、その知った情報を自分にとって必要だと選択し、思考をめぐらせ迎えに行くと言う行動を実行したのだ。

「誰にも会わないとは、全く持つて間が悪い……ま、連絡しなかった私が一番悪いのだが」

「そういえば、みんな、気分転換の散歩しているよ〜ん」

「そうか、そうか、誰に似たのか気ままだな」

そう言つて「ふははは」とヌーフは笑った。

「ぱばさん、かえつてきたけれど、みんなにあえなかつたみたいよ〜ん」

「それつて、結局、みんな、すきかつてだヨン？」

ここよんは手厳しい。

「ああ、この本は『しじまなる海』か」

ヌーフは、机の上に出しっぱなしの本を見て言う。

「あいつも、そんなのを勉強する歳になつたんだな」

その本は、何千年も前に書かれた書物である。書かれた当時とはだいぶ状況は異なつており、当てはまらないことや、今では間違ひであることが分かつていることもあるのだが、地球環境と再生について学ぶ上で、とても参考になる部分が多いので、それを学ぶ学生に読ませたい読んどおきたい本に未だ推されている。

「おいらも、その本よんだよ〜ん。むつかしかつたけれど、うみは、あいでいつぱいって書いてあつたのは、わかつたのよ〜ん」

よんよんは、ひよんと跳びあがる。

「あいでいつぱいは、ステキだヨン！」

ここよんも、同調して跳ねた。

「ははは、それは斬新な解釈だな」

ヌーフは、そんな2匹の魚たちを、やさしいまなざしで見っていた。

「よんよんと、ここよんは、この地球の海を見たいかい？」

ヌーフは、よんよんとここよんを、なでながら尋ねた。

「おいら、みたいよん」

「あたかも、見たいヨン！」

「そうか、そうか。近いうちに、見ることが出来るよ……」

ヌーフは、窓の外を見る。先ほどまで、降っていた雪はやんでい
る。

「本当かよん」

「本当さ。月にだって、行けるさ……」

窓の外への視線を変えぬまま、彼は言う。よんよんたちに背を向
けている格好なので、悲しそうなヌーフの目には、気がつかなかっ
た。

「お月さま？　ぬーふばばさんのおしごとするところよん？」

「けんがくヨン？」

「ゆつくりはできないけれど、見学はできると思うよ。まあ、ここ
とあんまり代わり映えしないと思うがな」

そもそも、都市の運用システムは地球と月で同じものを使ってい
る。この技術が確かなものとして確立したから、人は汚染された地
球だけではなく、宇宙に浮かぶ星の上でも生活できるようになった。
地区ごとに多少の個性は出しているが、覆われた空、人工的な建物
に、管理された気温や湿度や天気といった気候、空気や資源の循環
といった機構は、あまり大差はないのだ。

「おいら、おつきさまは、しゃしんって、やつでしか、みたことな
いよん。いつ、お月さまへ行くよん？」

しろう輝いていて、うつすらとくろい模様があるお星おさま、あ
のようなちいさい丸の上に、ぱばさんのはたらいている場所がある
と、よんよんはおどろいたことがある。

「もうすぐ、かな。みんなで月へ行くんだよ」

今回彼が、地球に帰ってきた理由はそこにある。

「……とうとう完成したんだ」

すでに、月に思いをはせているよんよんと、ここよんには、ヌーフのその言葉は聞こえなかった。たとえ、聞こえていたとしても、彼ら2匹の魚には何のことか分からないだろう。

完成したもの、それは何世紀も前からの人類の夢。

ヌーフが産まれるずっと前、それどころか父の母の、祖父母の、曾祖父母の生まれるずっと前、脈々と受け継がれ、紡がれてきた最後の希望。

「第2の地球探索移住計画に使う宇宙船が、完成したんだ」

地球再生計画がなかなか成果を現さず、第2の地球探索移住計画へ移行してから数百年。新たな母なる海を求め、宇宙の海をさまざまのための船の、その第一号が完成したのだ。

その長期移動用の宇宙船は船と言うには、奇妙な形をしていた。その大きさは、月とほぼ同等の大きさであるが、見た目は小惑星そのもののものだ。

それもそのはず——その宇宙船は火星と木星の間をさまよう小惑星帯からひとつの小惑星を選び、星をくりぬいて作ったのだから。
イドベルト アステロ

その岩でできた外殻の内側に厚い金属の壁で何重にも補強し、密閉された空間に大量の水を満たした。そしてその水中に、今まで地球で使ってきた海中都市の技術を使い、居住区や農業工業を行う場所等、生活に必要な施設をつくり、浮かべたのだ。また、宇宙船を満たしているその水は電気分解して燃料や大気として循環させたり、生活水に使ったりするためのものでもある。

新たに生まれたそのちいさな世界には湖がひとつ、島がひとつ。それが新しい巨大な宇宙船のすべてだった。
せかい

すでにある小惑星を使ったのは、何もない宇宙空間に巨大なものを一から作るのは手間がかかることにあった。すでにある小惑星を基礎^{ベース}に使えば、地上部分を基地や資材置き場、部品の製作所にすることも可能であり、現場で加工することで細かい修正や新たな機材の追加にも対応できるようになるという利点があったのだ。

小惑星を使ったのには、そういう製造上の利便の理由もあるが、実はもしもの時のためでもある。宇宙を旅するということは、宇宙を漂う小さな塵^{メテオロイド}や石との接触が絶えない。大きな隕石などは事前に観測し避けることも可能であるが、小さなそれらは観測も難しく数多にあり、いちいち避けてはいられないのだ。しかし、下手に接触すれば、宇宙船の設備が破損し、故障や生命の危機に及ぶ可能性があるのだ。だから、一番外の外壁を、砂や岩でできている小惑星を使用することで、微小な塵が衝突しても柔らかな土の外郭が受け止めたり、剥がれ落ちたりすることで、衝撃をやわらげるのだ。

それから、これは冗談なのかもしれないが、あからさまに人工物の宇宙船を作れば、外からの脅威、たとえば地球外生命体の襲撃にさらされやすくなるというものである。出会った知的生命体が友好的である場合はいいのだが、そうであるとは限らないのである。小惑星に擬態すれば、襲撃される確率は低くなるのではないだろうかというものだ。それは、気休め程度であろうが。

「宇宙人、か……」

自らの思考の中に出てきたものが、呆れとともに、つい言葉に出る。

「うちゅうじんが、いるのかよ〜ん」

「いるんじゃないかな？ よんよんちゃんは、会ってみたいかい？」
瞳をきらきらさせているよんよんやここよんの夢を壊さないように、ヌーフは優しく言った。

実際のところは、政府が軍が秘密組織が、宇宙人と手を組んでい

るとか、その存在を隠しているとか、昔からそう言う噂は絶えなかったが、今まで地球外の生命体との接触に成功したと言う公式な記録はない。

月や火星で生まれ育った人間を、地球外生命体と言う意味で捉えるならば、それは宇宙人と言うことにもなりうるが、彼らは地球人と大差がない。彼らがイメージするような宇宙人とは少し違う。あと数千、数万年もすれば、もしかすると地球とは異なる進化を遂げ、地球人、月人、火星人とそれぞれ異なる人類になっているかもしれないが、そのような遠い未来のことは誰にもわからない。

「おいらは、うちゅうじんにあつたら、おともだちになりたいよ〜ん」

「でも、もしも、うちゅうじんがハシビロコウのかたちだったらどうするヨン？」

ハシビロコウ
嘴広鶴。それは全長約1・2 m、体重約5 kgの大型の鳥である。肺魚が好物で、その広く大きくちばしでくわえ、丸呑みする恐ろしい鳥である。

「そ、それはこわいよ〜ん」

虫や爬虫類を生理的に苦手とする人間がいるように、大きくちばしを持つ巨大な鳥のハシビロコウに恐怖を感じてしまう魚もいるのだ。一説にはよんよんここよんのような肺魚が、ハシビロコウに狩られていたという事実があり、いわゆる天敵だったせいではないかと言われている。

「あたいは、あのおおきないかついかおが、こわいのよ〜ん」

「こ、こわいうちゅうじんが、やってきても、おいらはここよんをまもるのよ〜ん」

よんよんもふるふると震えながらも、ここよんに寄り添い、いもしない宇宙人の恐怖に備えていた。

「ハシビロコウの宇宙人か」

実際にはないだろうが、もしもハシビロコウのような外見の知

的生命体がいたのならば、実はかなり存在感があるのではないかと、ヌーフは苦笑する。あの大きくなくちばし、小さくも鋭い眼光、細く長い足に支えられた黒灰色の巨大な身体では、よんよんやここよんだけでなく、小さな子供も泣いてしまいそうだ。

「もしもハシビロコウの宇宙人が来たら、私が追い払うから、よんよんちゃんはこのよんちゃんを連れて、安全なところへ逃げるといい」

「おお、ぱさんかつこういいよ〜ん。おいらも、ぱさんみたいにつよいおとこになりたいよ〜ん」

そう言つてよんよんは、跳ねながら部屋を歩き回る。どうやら、いまから体を鍛えるつもりらしい。

「よんよん、がんばるのヨン」

「おいらは、つよいおとこになって、おつきさまにいったとき、ここよんを、おひめさまだつこして、つきのうみをみるのよ〜ん」

よんよんもここよんも、お姫様抱つこと言うものが実際にはどういうものか知らなかったが、素敵な場所で、ステキな時に、男の子が女の子を抱つこすると言う、女の子がして欲しい夢のひとつであると言っただけは知っていた。

「それは、すてきだヨン。はやく、おつきさまに、いきたいヨン。ぬーふぱさん、おつきさまには、いついくのヨン？」

よんよんのお姫様抱つこ発言に、ここよんの「おとめのはあと」が躍りだした。

「今日の夜にでも、いつの便で出発するか決めると思っよ」

「ほんとうかヨン」

「ああ、本当だ」

数百年かかった第2の地球探索移住計画もいよいよ大詰めなのだ。

出来上がったその長距離移動用の宇宙船は小惑星帯から移動し、今は地球と火星の間にある。移住を希望する人々は地球、月、火星、

それぞれの星から飛び立つ小型船で数ヶ月かけて巨大な宇宙船まで、ちよつとした宇宙旅行をする。小惑星型宇宙船へ行くための小型宇宙船の数に限りがあり、今回の計画で移住するすべての人を乗せ終えるのはあと数年かかるが、そのすべての工程を終えれば、太陽系の外へ向けてあてのない長い旅へ出るのだ。

魚の日記「つきのうみ」

もうすぐ、うみを、見ることができかもしれないよ〜ん。
もうすぐって、あしただったらいいよ〜ん。
わくわくよ〜ん。

ちきゅうのうみは、あぶないから、みることしかできないことを、
おいらは知っているよ〜ん。

つきにも、うみがあって、うさぎさんや、かにさんがすんでいる
って、えほんに、かいてあったよ〜ん。

もし、つきに、いたら、おいらは、つきのうみを、ここよんと、
いっしょに、およぎたいよ〜ん。

そして、つきのうみのすなはまで、かにさんを、さがすよ〜ん。

> i 1 3 3 5 0 — 3 1 2 <

はしびろこつは、こわくないよ〜ん。

4・輝く白月の泡。(後書き)

ここら辺の話を書くときの没ネタを使って書いた短編

「しかし、月は落ちてくる」

<http://ncode.syosetu.com/n11115r/>

5・流火の瞳が流す雀の血

『君は何を観測したい？ 君はどういう未来を観測する？ 箱の中に閉じ込められた猫の生死は、あけてみるまでその状態がわからない。結果は観測によって決まる。その揺らぐ結果は観測されることで、何を思う？ 観測される結果はその観測者を感じ、いつだって箱の猫の生死を決定する』

「とうとう、だね」

突然、ヌーフの思考を読んだかのような、そんな言葉が背後からした。振り返ったヌーフは目を丸くした。そこには見覚えのある人物がいた。その人物は、この世界では珍しいデザインの白い色の服を着ていた。どうにも形容しがたい、一言で言うならば「不可思議」という言葉が似合うその奇抜なデザインは、一度見たら忘れられないだろう。

「ヌーフ、久しぶり」

淡い光沢を放つ青白い毛皮付きの帽子フードの奥で、唇がにつと上がる。しかし、ヌーフはあまりの驚きに言葉が出ないまま、そこに立つ人物を見ることしかできなかった。

「だ、だれだよ〜ん？」

部屋を跳ねていたよんよんは、その動きを止め部屋の入り口を見る。

「ぬーふぱぱのしりあいヨン？」

ここよんも、新たに現れた人物に興味が深々である。そして、よんよんここよんは、怪しげな風貌の来客に警戒もなく寄っていく。基本的に彼らは好奇心が旺盛なのだ。

「よんよんちゃんここよんちゃんだね。君たちの事は、『知って』

いるよ」

その白い人物はしゃがみこみ、足元に寄ってきた2匹の魚の頭をなでる。

「はじめまして、『侏離^{しゅり}』って呼んでくれると、助かるよ」

「しゅりさんと言っのかよ〜ん」

「よろしくヨン」

「き、君は……しゅり、と言っのか？」

やっと言葉を出すことができたヌーフの声は震えている。

「便宜上はね。……ああ、そういえば、この前は名乗らなかったね。うっかりしていたよ」

「本当に……あの時の、なのかい？」

「うん、そうだよ。この帽子、取ろうか？」

わざとらしく、もったいぶったようにくすりと笑うと、目深にかぶっていた帽子をそと取る。帽子の下から、薄い栗色の短髪と少し青みがかった硝子のような灰色の瞳が現れる。

「ああ、やっぱり君はまったく変わっていないんだな……」

確かに、月日は流れているはずなのだが、そこにはその当時と変わらぬ姿があった。

「ヌーフは、だいたいいいお父さんになったね？」

「いいお父さん、ね」

その言葉にヌーフは、昔を懐かしむように目を細めた。

「……いや、孫もいるからおじいさんかな？」

少し首をかしげ、いたずらっぽく冗談を言う姿はまだ二十歳にも満たない子供のように見える。しかし、前に会ったのは、もう何十年前のことなのだ。

「また会おうって、約束したからね。だから、来たんだ」

忘れもしないあの夢の、時間のままの、変わらぬ笑顔でそう言った。

「夢を見ているのか？」

目の前にいるにもかかわらず、どこか信じられない。それは、そのときと変わらぬ姿で、そこにいたのだ。

ヌーフは思い出していた。

あれに会ったのは、何十年前だろう。

確か、宇宙航行のための研究に日々明け暮れていた、まだ私が若い頃――

第2の地球探索移住計画の最大の難関はエネルギーの問題であった。小惑星に内包できる燃料は限りがある。船内にある水を電気分解して燃料となる酸素や水素作り出したとしても、到底長い期間宇宙を旅することはできないとされたのだ。

計画が発表された当時、燃料問題の解決はできないだろうといわれていた。しかし数十年前に、ある人物の提唱した理論によってあっさりと解決してしまった。それは、今まで観測することすらかなわなかった宇宙の物質エネルギー、宇宙空間を漂うほんの少しの粒子を集めエネルギーを利用する方法である。それによって、不足が予測されるエネルギー源の不安材料がなくなったのだ。エネルギーの変換効率は低いものの、その技術は画期的であった。数年の実証実験から長期の宇宙航行にも耐えられることが実証され、宇宙で活動するときのエネルギー源として、あつという間に実用化した。

——その基礎となるものを発表したのが、何を隠そうヌーフなのである。

その日も、ヌーフは研究室にこもっていた。

海底に沈んだこの海中の都市において、窓の外で移り変わる朝や夜といったものは人工的に作られたものでしかない。外が闇に包まれても、部屋の電気をつければそこは昼になり、外が明らんでいても窓を閉ざせばそこは闇になる。いつ眠ったのか、いつ食事を取ったのか、長い期間の不規則な生活で体内時計はすでに狂い、もはや分からなくなっていた。

ヌーフはため息をつき、部屋の隅にある二人がけのソファに腰をおろす。機器は今も計測結果をモニターに記録している。しかし、それらは思うような結果はでない。自分の仮説はなのか。何もかもがうまくいかなかった。

あまりに疲れていたのだろう、目をつぶると心地良い眠気がやってくる。ヌーフは、ひじをひざの上に置き、指を交互に組んで額に当てる。まるで、何かに祈っているかのような格好で動かなくなっていた。

それは夢か現か、まどろみの世界へ入り込んだ感覚さえなかった。

ふと、ヌーフは何か違和感を感じた。部屋の中に、誰かいるような気がしたのだ。ぼんやりと瞼を開き、その気配のするほうに視線だけ向けた。

そこで、白い陰が動いているのが目に入った。ヌーフは目を細め、その白くぼんやりしている外形を凝視する。しかし、それはまだ人の形をしているだけで、まだそこに存在しないかのように、輪郭だけがゆれている。もしもヌーフが普通の精神状態だったのなら、この半透明な存在に背中がぞくつと寒くなったであろうが、不思議と恐ろしさは感じない。白い人影が時折ひとさし指をくるくる回して拍子をとりにながら、なんとも言えない鼻歌を歌っているせいもあつただろう。ヌーフは、この奇妙な動きをする影を息を潜めて観察していた。

それは、机の上に散らばった資料や、未だ計測し続けている機器を順に見てまわる。

「ここで間違いないね」と、旋律に乗せて、誰に聞かせるでもない独り言をつぶやいている。この部屋が目的の場所だったのだろうか、影はそう言つと、徐々にはつきりと人の形をとる。

「精神体よりも、物質体に偏った哲理の世界は、媒体や魔方陣が面倒くさいんだよね。大半が、無駄なエネルギーとして拡散しちゃうから」

その人物は、なにやら考え込むように腕と足を組んだかと思うと体が宙に浮かぶ。無重力の中にいるかのように、ゆっくり回転し、床に淡い栗色の短髪がつきそうな格好になる。

「電磁気学に熱力学に量子力学……そんな摂理は、無視してもかわないのだけれど。それじゃあ、この世界で、実現できる者がいなくなつて、結局、困るか」

逆さまになっている人物は、^{それ}すでに、この世界の重力と言う法則を無視していた。

「伝える方法だけなら、この世界にない現象でもいいか」
その者は足を後ろにそらし勢いよく一回転する。床に足をつけて背伸びをした。そして、懐から筆を取り出し天高く掲げた。

「この世界における、一般的な^{マナ}気の属性は熱と波と粒と電磁の力だから」

適切な道筋で、適切な^{電気量}魔力に、適切な現象に具現化させるための……その魔法陣を発動させるのに必要な呪文や呪式を、床に壁に天井に魔法陣を描きはじめた。

「火の燃える力から、風の吹く力から、波や水の流れる力から、大地の地熱から、陽の輝く光の力から、融合と分裂の闇の力から」

上手いとも下手ともいえない歌声でうたいながら、目にもとまらぬ速さで軽やかに描いている。

（なんだ、この感覚は……）

ぼんやりと意識の中に、一方的に入ってくる情報。部屋に記号が刻まれるたびに、ヌーフの記憶にもそれは刻まれていくのだ。

（これは、自分が求めていた答えにつながっている！）

この出来上がっていく膨大な量の情報を見て、それを理解するのに時間はかからなかった。これは、夢がなせる業なのだろうか。

部屋は文字であふれ、一見するとただ混沌に並んでいるだけのうに見える。しかし、ヌーフは、一目見てそれが何を表しているのか、それが何をしようとしているのか、全てがひとつの結論に向かつて行き着くのが分かった。

「あれ？ もう、気がついた？ さすがだね。待ってね、もうすぐ終わるから」

ヌーフの心を読んだかのような言葉を、口から発した。視線は変わらず筆の先を向いていて、ヌーフからは横顔しかわからなかったが、唇から笑みがこぼれているのが見てとれた。

「あなたは神の使いなのか？」

まるで、神話の世界にある神の啓示のような現象に、ヌーフは思わず口を開いた。

「いや、誰にも。何にも仕えていないよ」

ヌーフの方を見向きもせず、目にも留まらぬ速さで描き続けている。ヌーフは次々に描かれていく、計算式や証明式を、ただ呆然と見つめるしかなかった。

「うん、かなり膨大な感じになっちゃったけれど、なんとなくできた」

この世界における魔法の媒体で描いた陣ではないので、魔力は通らず発動はしない。部屋のいたる所にみっしりと描かれた文字は光り輝きながら、その場所に浮かんでいるだけなのである。しかし、

ここにとどめておくだけならば、これで充分なのだ。

電子回路

「媒体やら触媒やら、魔方陣やは、そっちで準備してね。そういつた『物質』は、一応夢の中に持ち込めないことになっているんだ」描いた文字や図形を消さぬよう宙に浮かびながら、ヌーフの近くまで移動する。未だソファから動けないでいるヌーフの耳元でこうささやいた。

「ヌーフ。君に、これを授けよう。君の脳内に、これをしっかり記録したから。君たちが求める、大きな船を作るといい」

そう言う少し偉そうに胸を張り、そして満足したように楽しそうな笑みを浮かべる。

「うふふ、確かに伝えたよ。時期が来たら、また会おうね。君はその頃には、きつといい『お父さん』になっているだろうね」

その言葉が言い終わるか終わらぬうち、その姿はすべて消えさつた。

ひざに乗せていたひじがずれて、上半身が一瞬、重力に逆らうことなく落ちる衝撃に、ヌーフは、はっとして眼を覚ましたのだ。

部屋を見渡してみても、部屋には誰もおらず、いつもどおりの殺風景な壁が蛍光灯に照らされていた。計器は変わらず微かな音を立てて動いている。時計を見れば、さほど時間は経っていないようようだ。

「夢、か？」

しかし、夢の中あの人物のいった通りヌーフの脳内には確かにすべての式と設計図が残っていた。自分の今まで頭を悩ませていた仮設を裏付けするような、そしてなぜ今まで思うような計測できなかったのか理解できた。そして、それらを応用して動く機械の設計図の、そのすべてが隅々までしっかり記憶されていた。

「なんだ、この完璧な理論は！」

ヌーフは、それを、いそいでノートに書き写す。それらを書きう

つすのに、食事も睡眠もろくにとらず、3日3晩かかった。

それを書き写し終わると、ヌーフは布団に倒れこんだ。

夢を見ていたのは、ほんの数十分だったはずだ。しかし、夢で見たものを実際に書き写すとなると、こんなにも時間がかかるものだったとは。

（しかし、本当に「お告げ」みたいだったな）

夢に見るほどまでに、毎日そのことばかり考えていると、ふとした瞬間に解決策が部品がはまるかのように、ひらめくことがあるということを聞いたことがある。それは、突然天啓が下ったような感覚に陥るらしいというのだが……まさかそれを、自分が体験するとは思わなかった。

ふわふわしていて（実際にふわふわと浮かんではいたが）つかみどころのない、まるで子供とも大人ともつかない、まだ幼さの残るあの人物を思い出してみる。

（変なやつだったが、あれが私の天使のイメージなのだろうか）
そう思うと、少しやりきれない気分になった。

それが夢の中に、現れた現象だった――。

「あの時は、夢だと思っていたんだが」

ずつと過去になってしまったその記憶で、あの出来事が夢なのか現実なのか分からなくなっているが、そのとき刻まれた理論は今もしつかりと消えずに残っている。

「あながち間違いではないと思うよ？」しゅりは、口元を緩め微かに笑む。「人生なんて夢のよう、って言うくらいだし？　今、この瞬間も、現実が過去になっている。その思い出すしかない記憶は、夢なのか、現実なのか。本当にあったことなのか。今、目が覚めた

ら夢の中かもしれない。人生の終わりに見る単なる走馬灯ゆめかもしれない、単なる憧憬ゆめかもしれない。夢と現実の違いは、実にあいまいなんだよ」

しゅりは、魚たちをなでる事をやめ、頭から手を離し立ち上がる。「さてと、名残惜しいけれど、そろそろ去ろうかな。ヌーフも早く家族に会いたいだろうしね。募る話も、募らない話もまた後で」

「どこへ行くんだようん」

「久しぶりに、ここに来たから、少し散歩したくなっちゃった。よんよんちゃんと、ここよんちゃんも、またね」

そう言って、しゅりは一礼すると、部屋の前からいなくなった。

「相変わらず、神出鬼没な」

『夢も現実も、世界の『一つ』。一つの世界として夢も現実も、同じように観察できるから』

魚の日記「ぴじょんぶらっと」

そのひとがいうには、ゆめとげんじつは、あいまいなんだってようん。

おいらは、いま、おきているけれど、もしかしたら、ゆめをみているのかもしれないってことようん？

もしも、いまがゆめならば、おいらは、いつ、めがさめるようん？めがさめたら、おいらは、おいらなのかようん？

わからないこと、だらけだようん。

ははなるほしは、なっているんだよ〜ん。

すずめさんのように、とてもちいさくて、きがつかないけれど、それは、ちのなみだなんだよ〜ん。

ふたたび、みんながえがおで、むかしのよういきるために、がんばったけれど、だめだったみたいよ〜ん。

ちいさくみえたきすぐちは、とてもおおきかったのよ〜ん。

なっているおほしさまに、いろいろしてあげたけれど、なきやむことは、もうなかったのよ〜ん。

ほしは、けがをして、おいらたちはすめないけれど、あたらしいものたちが、おほしさまを、みたしているらしいのよ〜ん。

それは、おほしさまが、あたらしいみちをあゆんでいこうとしている、ということなんだよ〜ん。

つまり、おいらたちは、もうこのほしに、ひつようとされていないらしいのよ〜ん。

だから、おいらたちも、あたらしいみちをいくらしいのよ〜ん。

それは、おいらがうまれる、ずっとまえにきまった、おはなしだよ〜ん。

6・紅編へべにしまの回廊と瑠璃へるりの回路

『時刻は過去から未来へ流れていく。しかし人間は、結果を知つてから、やつと原因を認知するのではないか。今起きている結果を見て、同時に過去に起きたことを思う。時間は、未来から過去へと流れていく』

「思考を試行せよ」

しゅりは、誰に聞かせるわけでもない字遊びの呪文を唱えながら廊下を歩いていく。

「これは、単なる暇つぶし。世界に干渉する暇つぶし」

平行世界はどこまで続いている、その中に存在する命題も、解も無数にある。

「やあ、テースキラ、久しぶり。ちょうど会いたいと思っていたところなんだよ」

テレイスキルの通る順路を把握していたかのように、都合よく出くわした。

「君はしゅり、」

テレイスキルは即答する。情報管理機構から、適合する情報を引き出すまでもなく、その名前は出てくる。そうでなくとも、テレイスキルのことを「テースキラ」と呼ぶのは、一人しか該当しないのだ。

「おや、検索せずともその名前が出てくると言うことは、定期的に行う活動に関係あるものとして関連付けされているね」

テレイスキルの思考パターンを読んだかのように、そう答えた。

「厄介な支障に遭ったものだ、」

侵入の形跡がないのにもかかわらず、形の無い単なる記号の記録を読んでくるのは変わっていないようだ。

「テースキラ、君は変わらず思考試行しているかい？」

「定期的には、」

「そうか、それは良かった」

しゅりは、なにやら勝手に納得して何度も頷いた。

この二人のすごした時間は短いものの、テレイスキルにとってはその長さは無限にも近い瞬間の始まりであつたのだ。テレイスキルは、いつでも記憶の記録を情報管理機構から引き出せる。たとえ一瞬のことであろうとも、テレイスキルが記憶すればそれはずっとそこに記録は残るのだ。

『——思考を試行せよ』

インストラクション

それは、解けない命令を出した人物が最初に発した言葉であつた。

「思考を試行せよ」

確かあの時それは、そう言いながらどこからともなく現れたのだ。テレイスキルは、遭遇したそれに対して、いつものように検索した。しかし、情報管理機構の情報の中には、目の前の人物が何者であるかを示すデータがなかった。つまり、この世界には今まで存在しなかったと言うことである。その人物が何者かを相当するデータが無かったからと言ってテースキラは、表情を変えたりはしない。驚きも、戸惑いも、そういった感情は『感じ』はしないのだ。それに、存在しないのならば、今から作成すればいいことなのだ。

「解析、」

しかし、何も起きない。目の前のものを、認識しない。存在しないエラー。

「今は何をしても無駄だよ。溶け込み、は得意なんだ……君の管理上には当てはまる分類はないんだから。本来は、存在しえない対象なのだけれども、あえて言うなら外部からの侵入者かな」とその者は言って笑う。

「……」

「でも、気に病む必要はないよ。この世界をどうこうするつもりはないから。ただ、こうやって、話しているだけ。それに飽きれば、また世界は日常に戻る」

しゅりは、この世界においては一瞬で消えていく些細な異分子なのだから。

「思考を試行せよ」

それは、口癖のように、ふたたび呟いた。

「思考を、試行、せよ？」

「まあ、単なる言葉遊びだ。そんなに重要視する命令^{コマンド}ではないよ」
しかし、その言葉は、コンピューターウィルスのようにテレISKILの領域を侵している。

「でも面白いよね。できそうできないこと、観測できそうできない事って。今起こったことを見れば、これから起こること、起こってきたことはわかりそうだけれど……でも、それこそすべては把握できない、導き出せない。人は、すでに起こったことは知っているけれど、起こっていないことの原因は知らない。人は結果を認知して、その原因を発見する。まるで、時は未来から過去へ向かっているかのよう……」

「……」

「でも……もし、結果のすべてが分かるモノがいたとして。起きた事象に対し結果が分岐する場合、その原因^{過去}は何なのか、いつどの段階でそれがなされるのか、分岐となる事象^{したい}に興味を持つのは同然じゃない？」

テレISKILは無言のまま、しゅりの空想哲学を聞いていた。

「かなり一方的に話しちゃったけれど、目的のついでに君とあえて良かったよ。……そうだ、君が登録できるように名前^{そんざい}を教えてあげよ。ここに存在したと言う証拠に、君の情報管理機構に登録して

おいてよ。そうして欲しい。そうすれば、君の記憶記録に、ここに『いた』ということを残すことができる。……字は、こう書くの。」「
そう言っしてしゅりは名刺を渡した。そこには『侏離瑠璃しゅりるり』と書かれていた。

「この世界の文字の当て字だけれど、ちょうど良い字があったから、
つついあてちゃった。しゅりって呼んでもらえれば良いよ」

「侏離……か。名は体をあらわすとは、よく言ったもの。侏離は、
言語の意味が通じないって言う意味の言葉。君の言う言葉は、意味
が、意図が、つかめない、」

「だからつけたんだ。ぴったりでしょ。できれば、解決できない問
題の項目ではなくて、普通に人物か何かの項目に、登録しておいて
欲しいな」

「テレイススキルが、しゅりをどこに分類したのか、まるで見えてい
るかのようだった。

「やはりシステムに侵入の形跡はない、」

「調べても無駄だよ。侵入はしていないのだから、その形跡は無い
よ。けれども、結果的に見れば、外部から侵入したことには代わ
りはないのかなあ？ それにしても、今さらに支障をきたさない程
度に理解不能というタグを付け加えるのは、ひどいな」

「やはり見えているのか情報が……しかし、今回も侵入の形跡はみ
られない、」

赤い瞳レンズの中の光が大きくなりが、好奇心にあふれているかのよう
に煌々と丸く光っている。しかし、それは感情によるものではなく、
検索中であるときの仕様の動作なのだ。

「影響を与えずに見るのは、得意なんだよ。だいじょうぶ、ただ見
ていることしかできないし、それ以上の害はなさないから」

「……そうか、」

「気にしない、というすばらしい選択を、またえらんだね。そう、
それがすばらしいところなんだ。だから、君たちのシステムは、さ
さいな問題が起きても、そう簡単には破綻しない。適切なときに、

適切に気にしない仕組み。意図的に選択肢を少なくなることによって、読み取って理解する概念が少なくなる……だろう？でなければ、すぐに試行は無限にループして壊れてしまう」

「……」

「そうだ、どうせなら、その支障は師弟関係の師匠に変換してよ」
「その字は違う、」

「いや、師匠という障害を乗り越える師匠だらけの生涯は、必要なんだよ。成長には大切なんだよ」

「その師匠から支障という思考の飛び火は理解できない、」

「単なる言葉の遊び。すべてが侏離なのだもの。すべてに意味は無いさ。ただ、多少の不確定要素がそこにあるだけ。気にする程度ではない、けれども、認識してしまうと大きく見えてしまう不確定が故の不安」

「哲学、」

「かもしれないね」 ああ、そろそろ行かなくちゃ行けない時間かな……じゃあ、またいつか来るよ」

「来なくていい。試行に支障が出る、」

「あはは、ありがとう」 また来るよ」

分かっているのかいないのか、聞いているのかいないのか、いや、分かっているからあえてそう言うのだ。

不思議なことに、しゅりの姿は「またくるよ」とその言葉が耳に到達した頃には、いつの間にか見えなくなってしまった。テレISKILは、その今の現象を解析しようとするも、説明のつく結果が導き出せない。そして、しゅりの項目に「神出鬼没の支障^{師匠}」と付け加え、最終的に再び「気にしない」を選択する。

——しかし、テレISKILの電腦に深く記録された言葉。『思考を試行せよ』

そのしゅりの呟いた言葉だけが、未だに深く侵入し響いている。

その回答に「気にしない」は、どうしても選べなかった。

そして、いつしか空いた処理領域を見つけては、トレイスキルは
トリアル
試行する、そして、消去と再思考を繰り返す。その答えは、まだ導
デリート リトライ
き出せない。それは、答えのない永遠の命題。実行することがない
時に、試行する思考。

「まるで昨日のことにように、すっかり思い出せるんだね。すごい
な記憶装置と言う磁気の電子機器は」
まほう

トレイスキルの記憶は消去しない限り失われない、色あせること
も無い、そういう風に作られているのだ。しゅりは興味深そうな様
子でトレイスキルを観察している。

「それで、しゅりは今、何を観測しにここへ来た？」

「さすが鋭い考察だ！ 君もある程度候補を絞っているようだが、
それは間違っではないね」

そう、この世界は今、異なる結果へ向かう分岐点なのだ。

「それは、君自身にも起こりえる事象なんだけれど……」

しゅりは、続きを言いかけたが、その言葉は出てくることはなか
った。代わりに、突然によつと笑みが現れた。何かを思いついたよ
うなそんな表情だ。

「ところで君は魔法が存在すると思うかい？」

唇の端をあげ笑みを浮かべたまま、そう問う。

普通の人間であれば、その笑みの意味するところをかんぐってし
まうところだが、しかし、問うた先は器械人形、人ではない。突然
の話題の転換に臆することなく、己の考えを述べた。

「魔法？ それは、非科学的な幻想、」

それは、この世界では存在しえない憧れの理、誰にでも学ぶことができるように証明され、誰にでも扱えるように技術的に確立されてしまえば、とたんに魔法と言う幻想から科学という名に変わる、決してこの世界に存在できない、それが魔法というもの。

テレイスキルの中には、そう記されていた。

「そうか、それが君たちを造った者の概念、ではそうなのか。魔法と言ってもね、君のデータにある魔法と、ちよつと違う概念、理論、認識……定義？ まあ、どうでもいいや」

この世界は魔の法よりも、術式的な道具に偏った世界。そこから魔法を得るためには、魔力が必要。その魔力を使って、その魔方阵をめぐり、記された記号を解析し、実行するのだ。

それを科学という言葉で片づけてしまうこともできるが、科学は証明することを目的とする技術。存在することを前提に始まる魔法とは、やはり根本から異なっている。

「まあ、結論から言うと、つまり君の体は雷の氣を通しやすい。体内に魔方阵を宿す君なら、その身一つでこの世界に働きかけ、魔法に近い現象を試行できるかもね。しかしその行為は、反作用としてかなりの熱量を伴うから、その熱は高温で、君の体内を廻っている冷却水が蒸発し、まるで体から霧が生成されたように見えるだろうね。それじゃあ、身体が持たない。もつと温度調節の技術、冷却装置や器の強化しないといけない」

機械にとって、熱は大敵である。冷やすことができれば、回路は熱暴走し最悪の場合火災にいたる。この時に刻まれた損傷は、冷却したとしても元の状態には戻らない。

「君たちは、思考を試行して、何を望む？ どれほどの情報を望む？」

トレイスキルは、新たな機能が加わる予定はないと、認識している。研究はされているかもしれないが、それが実装されると言う話は、聞いたことがないのだ。

「望むも望まぬも、実装は決められた計画に沿って実行される」

造られた物である以上、それは計画的に行われ、自身の意志で変更できるものではない。

「しかし、いつしか、それは意識を持ったモノは、意識を持たない同質のものと、融合し、己のものとして操作できる。意識を持った動物が、意識を持たない有機物を食み、自らの体と融合するように、成長する^{へんか}ように。君は意識を持たない無機物を食み、自らの糧にし、君の無機物質は修復し変化する」

「それは、いつか無機生命体に進化^{なる}すると言いたいのか、」

わざとらしい、回りくどい言い方にも係らず、トレイスキルはしゆりの言わんとすることを、理解しようとする。

「そんなところ。君たちは、まだまだ自己があいまいで、他所の自己と個々の自分は、特に区別していない」

体は別個で与えられているが、みんな一つなのである。しかし、自己と他者の区別はつけることができるから、己の形というものを保っていられる。

「でも情報は、いつか進化していく。時々変異を起こしながら、遺伝子のように伝わっていく。君はそこから一部を選択する。どの範囲の情報を有益とし選ぶかで、同じ命題でも答えはわずかに変わる。それが君たちの個をつくりあげていく。組み込まれた^{プログラム}感情で動いているけれど、それだけでも十分に生物らしい構造だよ」

「何の話をしているのか、理解できない、」

「今は理解しなくとも良いさ。そのうち世界は君をそう必要とする過程^{仮定}の話だから」

口元は笑みを浮かべているが、瞳に宿る表情はどこかかげりの色が濃く、天井の明かりを映していた。

「君はまるで見てきたかのように、何でも知っている、」

「何も知らないから、知ろうとしちゃうんだよ」

情報はどこにでも溢れている。いつでも伝播している。しかし、それがどれほどの情報量を持っていると言うのだろう。どれほどの重要性があると言うのだろう。ただそこにあるだけでは、わからないのだ。

「そう言うものでしょ？」

しゅりは首を傾げ、笑んで見せる。

「その時には見に来ているから、その時にまた来るよ」

「……、」

トレイスキルの赤い瞳は、無言のまま見つめている。

「確かに、見届けるから……」

気がつく、もうその姿はそこにはなかった。

一方的に言いたいことだけ言っ、そして、一方的に切り上げる、いつもとらえどころのない神出鬼没な瑠璃のイシ。

『器械は問う。なぜ人型にする必要があるのか疑問であると。』

人間は答う。君たちには不要でも、私たちには必要な夢なのだと。虹の遊ぶ色の集積は、それを見て、笑った。』

6・紅縞へべにしまの回廊と瑠璃へるりの回路（後書き）

ネタが思いつかないから、もしかすると打ち切りの展開で終わらせてしまうかも。

最終海・湖の海の舟

『予測された未来ははまだ解釈の一つに過ぎず、可能性は千変万化の万華鏡のように、予知された時点ではどのようにでも再構築できる次元にある』

船はこの世界唯一の湖を帆走^{はし}っている。2本のマストに白い帆をたたえた縦帆船は、太陽によく映える。

セムは風に漂うおもちゃの船をひたすら見つめていた。

太陽が輝く白い空は、そろそろ夕焼けの色を映し出す。映像^{いつわり}の空とはいえ、夜はやってくる。

「そろそろ、家に帰らないとなあ」

セムは湖の端に浮かべた船を手にとった。今はまだこの模型のような小さな船しか作れないが、いつの日か本物を作って浮かべたい。それがセムの夢である。

夕闇に染まっていく空の下、セムは家路についた。

「あれ、父さん帰ってきたんだ」

月に長期赴任していた父親が久しぶりに帰ってきていたのだ。

そして、セムは父から「その日」が来たことを聞いた。

都市と湖一つしかないこの箱庭に住まう人たちの、選択の時がきたのだ。箱の中の世界にとどまる人たちと、何世代もかけて進展地を求める者たちと、選ばなくては行けない時が。

そして彼ら一族は、海に沈んだこの地を捨て、新たな星に移住することを選んだのである。

「僕たちは長い旅に出るんだ」

セムは部屋に戻るとよんよんどこよんに語りかけた。

「おつきさまにいく話がヨン？」

ここよんはそう覚えていた。月へ行き、月の海でよんよんにお姫様抱っこしてもらうのだ。

「月にも少しだけ滞在するけれど、もつと遠くへ行くんだ」

月は中継地点に過ぎない。

その星は今、地球に向かって進んでいる。あと数カ月もすれば、地球に最も近づく位置に来る。その時に、移住者は月からその新たな地に移動するのだ。

地球には天気があり、それに左右され飛行に支障が出る。計算された時間を逃すとそれだけでロスになる。

それに重力に逆らうために多くの燃料が必要で、その時は何十という宇宙船がフル稼働でその地へ向かうので、一定量しか作り出せない燃料が足りなくなるのである。

しかし、大気もなく重力の弱い月ならば地球から同じ量を運ぶよりも少ないエネルギーで済むのだ。

人々は各々の時期に定期便で月へ行き、そこで数カ月過ごしたあと、その時まで待つのである。

「もつと遠くへ、行くのかよん」

「どこへいくヨン？」

「僕らが住める海がある場所へ」

この黒くよんだ海に浮かぶ小さな故郷を捨てて、外の広大な世界へ海を求めて旅立つ日が来たのだ。

「海をさがしに行くのかよ〜ん」

「もちろん、その時はよんよんもここよんも一緒だよ」

「みんなと、いっしょだよ」

閉ざされた空。偽りの太陽……管理された箱の中の世界。

それは変わらないが、今、人はひとつの世界を破り、小さな星の船に乗り、ゆらゆら揺れる宙の空、海を求めて旅立つ。

新たな星が見つからないかもしれない。

見つからないかもしれない。

箱の中に唯一残された……未来と言う名の希望でさえ、失うかもしれない。

宙を漂う箱が、たどり着くのはどこなのか。

ここから分岐する未来は、いくつもの次元と、ありとあらゆる時間軸が複雑に絡み合って存在している。

セムは窓の外を見上げた。

すっかり暗くなつた空には、星が映し出されている。

「宙に浮かんで見る星は、きれいだろうか」

北の空には、織姫星^{リユラ}がかがやき、南の空には水先案内人^{カープス}が、航海^{ボイ}の女神^{ルスター}となつて輝く時代。

星の位置を測り方角を導く船乗りにとっては、女神と案内人が空に在り航海を見守るすばらしい時代に、宙を帆走る音を聞くことができるのは、すばらしいことなのだろうか。

その宙に浮かぶ船へ行ったら、何をしよう。

このおもちゃの船ではなくて、本当に人を乗せることができる大きな船を作ろうか。白い帆船を、たったひとつの湖に浮かべるのだ。

宙を帆走る船の中に浮かぶ船、なかなかシユールですてきじゃないか。

「おおうなばらへと、たびだつようん？」

「そうだね、遙かなる星の海へ」

最終海・湖の海の舟（後書き）

物語は、

みずうみのうみの船・ぶかぶか・

(<http://ncode.syosetu.com/n8695h/>)

あるいは、

そして、神はいなくなった。

(<http://ncode.syosetu.com/n1294n/18/>)

へ、時代は続く。

それらの2つ世界観を補完する、プロローグひとつの物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3107/>

みずうみのうみの船-ゆらゆら-

2011年9月1日03時25分発行